

編集後記

令和二年度を以て、平成二十八年度に文部科学省私立大学研究ブランディング事業の一つとして選定された「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代とに語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―事業（以下、本事業）は、当初計画された事業期間を終えることとなった。

本年度は新型コロナウイルス感染症の拡大もあり、事業計画を見直さざるをえない点もあったが、無事に『古事記学』第七号を刊行することができた。

さて、本号には創刊以来、継続してきた『古事記』の校訂本文・注釈の続編、「大國主神の系譜」及び補注解説を掲載する。本文校訂・注釈と補注解説は、谷口雅博センター長（文学部教授）を中心とする定例研究会での発表に基づく成果である。なお、本年度の定例研究会は全て遠隔で開催された。また、補注解説は、本事業に参画する諸分野の専攻を持つ教員間で意見を交換し、『古事記』を多角的に解釈していこうとする試みの成果であり、『古事記』の学

際的研究を謳う本事業の独自性を示す明確な特色の一つである。

次いで、遠隔で開催された定例研究会の発表等を前提とする三本の論考を掲載した。

高橋俊之氏の論考は、『古事記』序文の前提となったと考えられる「上五経正義表」について検討し、そこから『古事記』序文の性格について考察したものである。

土佐秀里氏の論考は、『古事記』本文を漢文という枠組みの中で捉え返し、「教覚」と「不覚」という用例を検討して、『古事記』の用字法における「創造的・文学的な表現性」を考察している。

鶴橋辰成氏の論考は、本事業がこれまで取り組んできた『古事記』アートコンテンツの応募作品を分析することで、現代における『古事記』受容の一端を明らかにしようとする。

また本事業の成果を社会に共有するため、一般聴衆も対象とした令和元年度の国際ワークショップ「世界と次世代に伝える日本の伝統文化」及び国際シンポジウム「神話・伝承の教材化と実践―子ども古

事記」がひろく世界―」の内容も掲載している。いずれも広く世界と次世代に日本の伝統文化を発信・継承するにはどうすべきかという目的のもとに開催されたものである。詳細については、講演録をご参照いただければ幸いである。

この他、敷田年治『古事記標注』の翻刻と研究及び「英訳古事記」を継続して掲載している。本事業の着実な研究成果として御覧いただければと思う。

未曾有のコロナ禍にあつて、本年度の事業成果の国際発信については、国際学会やワークショップへの参加を中止せざるを得なかったため十全な活動は展開できなかった。しかし、可能な限りで研究活動を展開できたのではないかと考えている。

最後に、本事業は本年度を以て終了するため成果論集としての本誌も一つの区切りを迎えたが、本事業の柱であり、本学の色となる二十一世紀の『古事記伝』編纂については、今後も継続される予定である。引き続きご支援、ご指導を戴ければ幸いである。

（武田幸也）